動労千葉

動労千葉結成10周年！

国鉄千葉動力車労働組合
〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）
電話（鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

89.10.31 No. 3102

首切りを絶叫するJR総連・革マル

「地労委命令は支離滅裂」（松田常務発言）

JR総連を絶対にゆるすな

関連会社顧問に革マル分子が

『汗を流して働らいている社員がむくわれていない……会社や東鉄労の姿勢にもうがまんできない』と、馬喰町駅では一挙に十三名が革マルJR総連から決別した。今、全国で同様の事態が続いている。

「分割・民営化」体制の最大の矛盾＝弱点をなした当局・革マル連合は、清算事業団闘争の本格的開始を前に、かってない危機に直面しているのである。正義も大義もすて、会社の手先に成り下り、当局の威をかりてかろうじて維持している組織に展望や発展などあるはずがない。

今や彼らは、闘うすべての者の怒りに包囲されているのだ。まさに、解体・一掃の機は熟したといえるのである。

目にあまる癒着の実態

八月二一日の読売・夕刊でも報道されているように、東日本関連会社顧問に八名の東鉄労幹部が就任しているなど、当局と革マルが癒着した異常な労務支配体制は、その不正義性と国鉄労働者の不屈の抵抗により危機をいっそう深刻なものにしている。

共同して地労委破壊にのり出す

革マルJR総連　九月発行の〝討議資料〟「JRの発展をめざして」では、

・国鉄改革で残された事業団問題について、国労の労働委員会を利用したJR倒産運動を許さず、一企業一組合達成にむけて奮闘する。国労が目標にしている事業団の特別対策期限の延長は、働かない者に金を払えというものだ。

何んと！　革マルは清算事業団＝働かない者、働かない者に金を払うな＝首を切れと要求しているのである。こんなことが許せるか！

松田JR東日本常務取締　七月二一日の中労委「東日本旅客鉄道不当労働行為事件」の第二回審問で目、耳を疑いたくなるような発言をしている。

伊藤被申立人代理人「どうしても承知できないことですが、あなたは神奈川地労委に対し「気が狂った（ママ）」とか「なんとくだらないやつら」とか「この世のものとは思えない連中」と言っていますが今でもそう思っているのですか」

松田証人　「そう思っている」

伊藤代理人　「誹謗・中傷じゃないですか」

松田証人　「意見を異にするわけだから当然批判も非難もし、抗議の意味も入る」

また、松田常務は前段の証言で、「地労委命令は、支離滅裂」と平き直っているのである。

この革マルと松田常務取締役の態度に怒りをおぼえない労働者がいるだろうか？！

当局はその後の九月二五日「雇用関係不存在確認」（首を切った側が切られた者を相手に訴訟をおこした）なる前代未聞の超反動的訴訟をおこした。労組法や労働委員会命令をふみ破る当局を絶対許してはならない。

今こそ、当局・革マルの大乱調、アセリを見据え、怒りの弾劾を叩きつけよう。

当局、JR総連の工作をつたえるマスコミ

JR東労組 幹部相次ぎ子会社顧問

（21読売新聞）

JR東日本で最大の労働組合、JR東労組（松崎明委員長、五万四千人）の役員（8）相次いでJR東日本の子会社の顧問に就任、さらに（9）そうなことが二十一日わかった。JR東日本は、労使協調路線をとる同労組を中心にしたジェイアール高崎商事など、JR東日本が一〇〇％出資して設立した子会社五社。非常勤顧問は、取締役会にも出席して意見を述べることができる。ただし、無報酬。

同労組幹部の非常勤顧問就任は、今年初めに開かれたJR東日本と同労組との経営協議会の席上、住田正二社長が「組合の幹部にも経営のことを勉強してもらえたら」と発言したのがきっかけ。旧動労、鉄労、全施労などを中心に、労使協調路線をとっている同労組が、この機会をとらえて経営に加わることになった。

解してもらおうと実施しているものだが、労組幹部が組合活動を続けながら経営に〝参加〟するのは異例。それだけに、この新しい協調路線が注目されている。

顧問（非常勤）になった

動労千葉　とき 1989.11.3 9時

第11回団結祭

ところ 千葉鉄道学園　10周年記念

全組合員が血を流し、涙を流し、そして勝利した10年！